

病前独居であった脳卒中高齢者の自宅転帰に影響する要因

～別居家族の支援に着目して～

小泉 直樹¹⁾ 中島 崇暁¹⁾ 風晴 俊之¹⁾ 近内 弘人¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 脳神経内科

[はじめに]脳血管障害患者の自宅転帰に関する因子として、石森らは ALD 能力と日中の介護が常時可能な同居家族の有無が重要であると報告している。しかし、近年、高齢者世帯や独居高齢者が増加し、家族介助が望めず、自宅での生活が困難となる症例は少なくない。一方、臨床現場では独居高齢者の場合、別居の家族に支援を依頼し自宅退院に繋がっている症例も経験する。そこで今回、独居高齢者の自宅転帰に影響している因子を抽出し、検討した。

[対象・方法]平成 25 年 6 月から平成 29 年 4 月に回復期リハビリ病棟に入棟した 65 歳以上の脳卒中患者で、入院前独居生活だった 121 名中、退院後他者の支援が必要ない者を除外した 103 名(78.6±7.0 歳、自宅転帰群 40 名・施設群 63 名)を対象とした。転帰先(自宅転帰群と施設群)を独立変数とし、年齢・性別・退院時 FIM 運動項目(FIM 運動)・退院時 FIM 認知項目(FIM 認知)・別居家族の支援状況の有無(日中すべて可能・日中一部可能・夜間すべて可能・夜間一部可能)を従属変数としてロジスティック回帰分析を行なった。

[結果]ロジスティック回帰分析の結果、FIM 運動、FIM 認知、別居家族の日中の一部支援が転帰先と有意な関連を示し($p<0.05$)、オッズ比は FIM 運動 1.2、FIM 認知 1.2、別居家族による日中の一部支援は 10.0 であった。

[考察]脳卒中独居高齢者の自宅転帰に影響する因子として、FIM の運動項目と認知項目、別居家族の日中の一部介護支援が抽出された。ADL 能力の重要性については、先行研究と一致した。また、間接的ではあっても家族の支援を得られることが、独居生活を送るうえで重要となることが示唆された。